

# 平城宮第 132 次発掘調査現地説明会資料

奈良国立文化財研究所  
平城宮跡発掘調査部  
昭和56年8月22日  
山岸 常人

はじめに 平城宮跡発掘調査部は第132次調査として平城宮の大極殿後殿とそれにとりつく回廊の発掘調査を行ってきた。発掘面積は約2500㎡で、調査は昭和56年6月22日より開始し、現在進行中である。

従来の調査 調査地は第二次大極殿地域の北部にあたり、そこには東西約15m南北約8mの小土壇が残り後殿の一部と考えられていた。大正13年、内裏・大極殿一帯の保存工事に際し東回廊の雨落溝を検出しており、また当研究所が昭和30年に行った第1次の発掘調査により回廊東南隅の構造・規模が明かになっている。さらに、大極殿は昭和53年の第113次調査でその規模や下層遺構が確認され、北側の内裏地区も昭和29年以来数次にわたる調査でほぼその概要が明かになっている。今回の調査ではこれまでの調査成果をふまえながら、未調査であった後殿一帯の遺構とその変遷を明かにすることを目的としている。

## 1. 遺 構

調査地域の土層は、まず従来からの整備事業による盛土があり、その下に旧水田の耕土・床土がある。その下から奈良時代の遺構が検出される。検出した遺構は大極殿後殿、その東西にとりつく回廊、大極殿と後殿をつなぐ軒廊その他である。

大極殿後殿 後殿周辺は造宮前にあった神明野古墳の墳丘部を削平し周濠を埋めた上で整地して、後殿基壇を築成している。後殿基壇周辺の整地は径1cm程度の小礫敷と、その上層の径5～15cmの小石敷の二時期がある。後殿基壇は黄褐色の粘質土とバラス混り砂質土を互層に積む版築を行っている。

基壇上部は削平が著しく、土壇として残っている部分ですら、その上半部は近世の盛土であったため、礎石や根石は殆ど残っていない。しかし基壇北側の雨落溝がほぼ完全に残っており、それが東西隅で折れ曲って回廊の雨落溝に連なっていること、南雨落溝はないが基壇化粧の抜取痕跡があることから、基壇規模が判明した。基壇規模は東西41.5m(140尺)、南北13.5m(45尺)である。基壇外装は、南側抜取溝に凝灰岩製地覆石・束石・羽目石・葛石等の破片があったことから壇正積基壇と推定される。

基壇中央部の南と北二ヶ所に礎石の根石が残る。この間隔は東西9m(30尺)、南北9.6m(32尺)で、これによれば後殿は、桁行9間、梁間2間、桁行方向の柱間15尺(ただし両脇間のみ12尺)、梁行方向の柱間16尺、切妻造の建物に復原できる。この柱間は大極殿の規模と一致する。基壇の出は正背面は2m(6尺5寸)、側面は1.7m(5尺5寸)である。

北雨落溝は凝灰岩切石で作られている。残りのよい部分では溝幅は45cmである。溝内側の地覆石は3ヶ所で各々4.1m分のみ幅が45cmに拡大し、その分溝が狭くなっている部分がある。大極殿の軒廊位置及び東西両脇の階段の位置と一致し、ここに石階がとりついていたことが判る。この張出し附近から石階に用いた三角形の羽目石が出土しており、これによって石階を復原すると、基壇に入り込み、3～4段となる。

後殿に回廊がとりつく部分には基壇化粧の抜取痕跡が溝状に残り、さらに約2m外側、回廊の後殿とりつき部分の柱位置に沿って抜取の溝がある。このことから後殿妻側にも基壇の外装を行い、段状に回廊基壇とつながっていたものと思われる。

北雨落溝は、後殿北側を細礫で整地した際同時に埋められており、基壇の改修を示唆する。

軒廊 後殿南側中央には大極殿とつなぐ軒廊がある。軒廊は二度にわけて築成されており、はじめ中央幅約4mを版築とし、後に両側に凝灰岩片を含む黄褐色土で上げて約8mとしている。拡幅後の基壇化粧の抜取痕跡があり、後殿と一連の外装を行っていたことが判る。軒廊上に礎石の痕跡はなく削平されているらしい。

回廊 大極殿回廊のうち北面東回廊と、北面西回廊・東面回廊・西面回廊の一部とを検出した。回廊の基壇幅は9m(30尺)、長さは北面東回廊及び同西回廊が各々40m(135尺)東面西回廊が78m(260尺)ある。従って大極殿は東西121.5m、南北87mの回廊で囲まれていることになる。

回廊基壇上には3列に並ぶ礎石抜取穴列がある。桁行柱間は3.9m(13尺)、梁行柱間3m(10尺)である。北面東回廊は11間あり、発掘区東端で南へ折れて東面回廊となり4間分を検出した。基壇の長さから考えると東面回廊は19間である。抜取穴の径は約1～2mで、さらにその外側に据えつけ穴を残すものもある。中央柱列では抜取穴の間に幅40cmの溝があるが、棟柱通の地覆石抜取跡であろう。以上のことから回廊は棟通を壁又は連子窓とする複廊に復原できる。なお北面東回廊の、後殿から4間目の地覆石は幅が約1mあり、ここには扉口が設けられていたであろう。

回廊の基壇外装は凝灰岩製羽目石がわずかに残るのみであるが、その羽目石を内側々石とする雨落溝は東面回廊・西面回廊でよく残っており、凝灰岩のない部分でもその抜取痕跡が全般的に存在していた。羽目石・溝底石・側石の寸法は後殿のそれと殆どかわらない。北面西回廊南雨落溝の後殿とりつき部分では、溝底石の三方が側石で囲まれ、雨落溝が後殿南にはまわっていないことを示している。なお基壇の出は1.5m(5尺)である。

その他の遺構 北面東回廊南側には梁間二間の南北棟の掘立柱建物がある。柱間は8尺で、方位は北でやや西にふれている。周囲には雨落溝をめぐらす。

北面東回廊北側には4間×2間の総柱の掘立柱建物がある。柱間は7尺である。柱穴からは、奈良末から平安初頭の土器が出土した。

内裏から大極殿一帯は、5世紀代の前方後円墳である神明野古墳の上にあたる。今回の調査でもその周濠と墳丘の葺石の一部を検出した。

## 2. 遺 物

後殿及び回廊の雨落溝周辺を中心に多数の瓦が散乱しており、その中から軒丸瓦75点、軒平瓦76点、鬼瓦1点が出土している。軒瓦は表の如く6225、6663型式が最も多く、これが後殿・回廊に使用されていたと考えられる。鬼瓦と、通常より径の大きい6225-L型式の軒丸瓦が後殿の棟を飾っていたのであろう。

土器は殆ど出土していない。これはこの地域の性格をよく物語っている。

## 3. ま と め

今回の調査では大極殿後殿及び回廊の基壇と建物の規模等が明かとなった。

他の宮の大極殿後殿と比較してみよう。難波宮では聖武朝の大極殿後殿が発掘され、復原されている。建物規模は難波宮が7間×2間と平城宮よりひとまわり小さいものの、基壇に入り込んだ石階、大極殿とつなぐ軒廊、後殿にとりつく回廊、基壇周辺の小礫による整地等、類似点が多い。

一方平安宮では、『年中行事絵巻』等によると、回廊は後殿にとりつかず大極殿にとりつく、後殿の階段は基壇に入り込まない等の差異はあるものの、回廊は複廊で、大極殿両側の回廊に扉口が開かれていたこと等の共通点もある。

今回検出した後殿及び回廊は、所用瓦から養老から天平年間に創建されたと考えられる。しかし軒廊の拡幅に伴い後殿南面基壇外装を造りかえていること、後殿北面基壇外装にも改修の形跡があること等から、後殿を改修した可能性は高い。大極殿にも改修の形跡があり、大極殿院一帯がある時期改修されたと考えられる。しかしこの点については改修の有無も含め、今後の調査をまって結論を下したい。

## 出 土 軒 瓦 一 覧

軒 丸 瓦			軒 平 瓦			
時 期	型 式	点 数	時 期	型 式	点 数	
I 期 (和銅～養老)	6 2 8 4	3	II 期 (養老～天平)	6 6 6 4	4	
	6 2 8 2-A	1		6 6 6 4-F	5	
	II 期 (養老～天平)	6 2 2 5		52	6 6 6 3	8
		6 2 2 5-L		1	6 6 6 3-A	1
		6 3 1 3		1	6 6 6 3-C	44
	6 2 9 1	1	6 6 8 5-B	1		
	6 3 0 8	3	III 期 (天平勝宝頃)	6 7 3 2	1	
III 期 (天平勝宝頃)	6 1 3 3	12		6 6 9 1-A	1	
	6 1 3 4	1		6 7 2 1	2	
				6 7 3 2	1	
				6 6 8 9-C	1	
			6 7 2 1-J	1		
			IV 期 (天平宝字頃)	6 8 0 1-A	5	
				6 7 2 5-C	1	

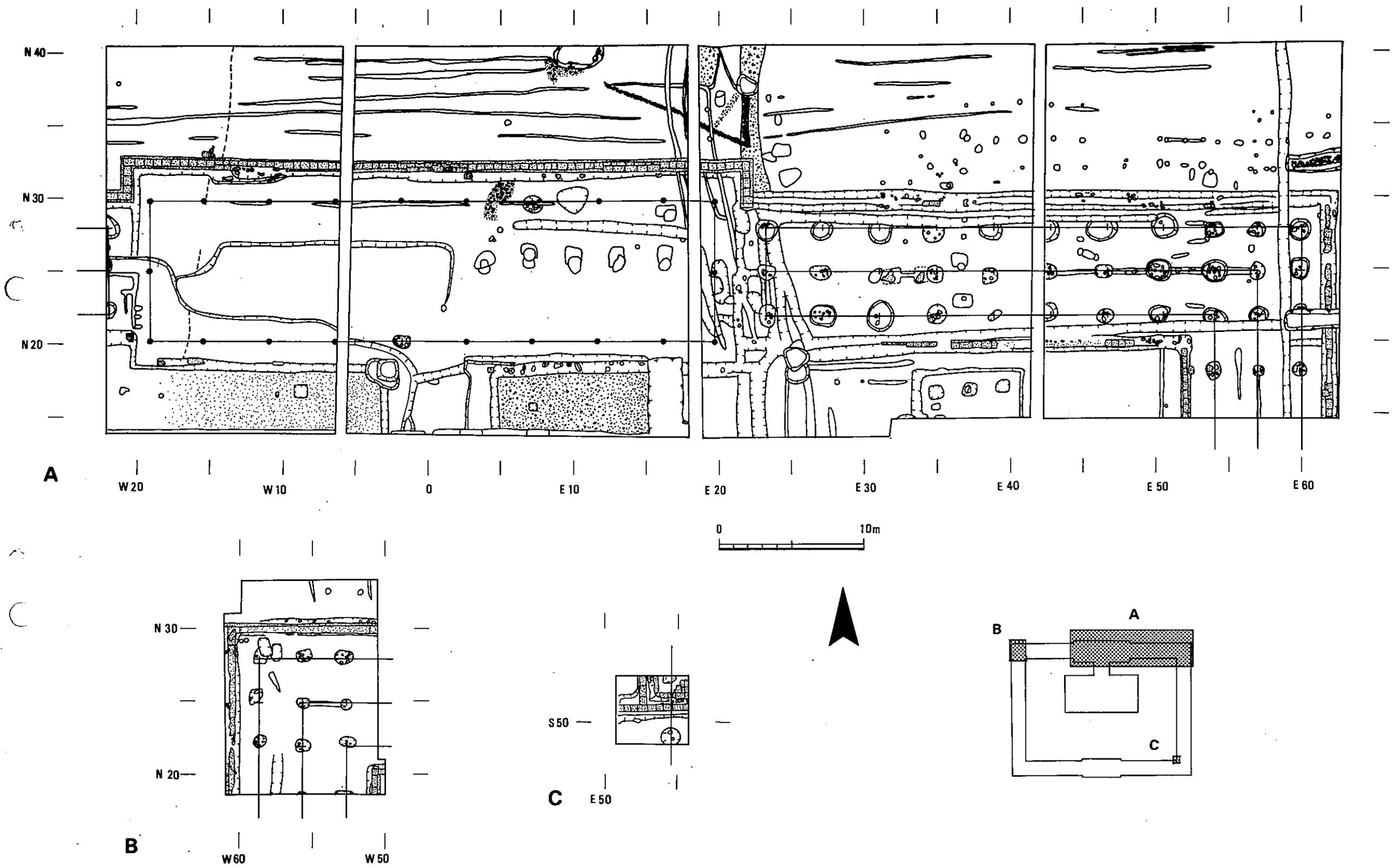


図1 平城宮第132次発掘調査遺構図

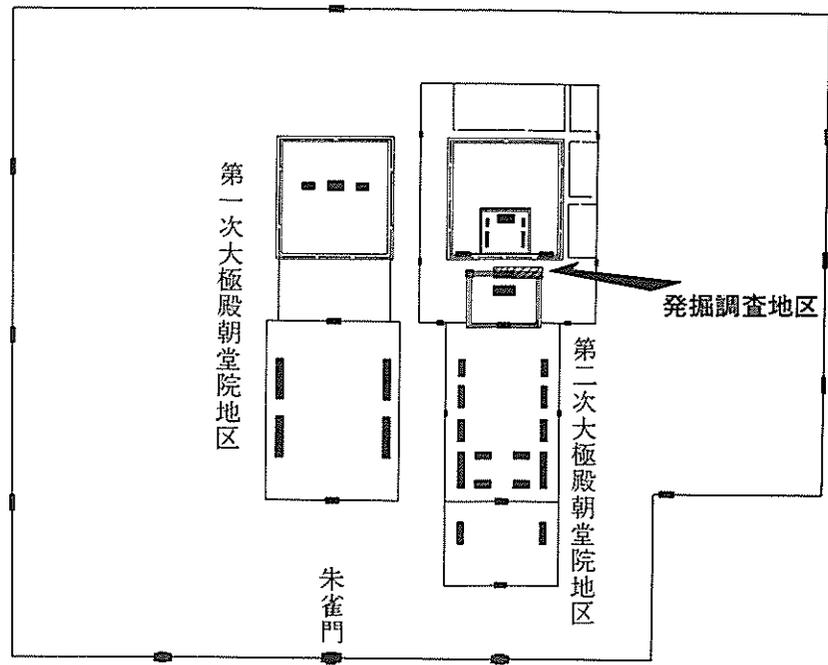


図2 平城宮第132次発掘調査位置図

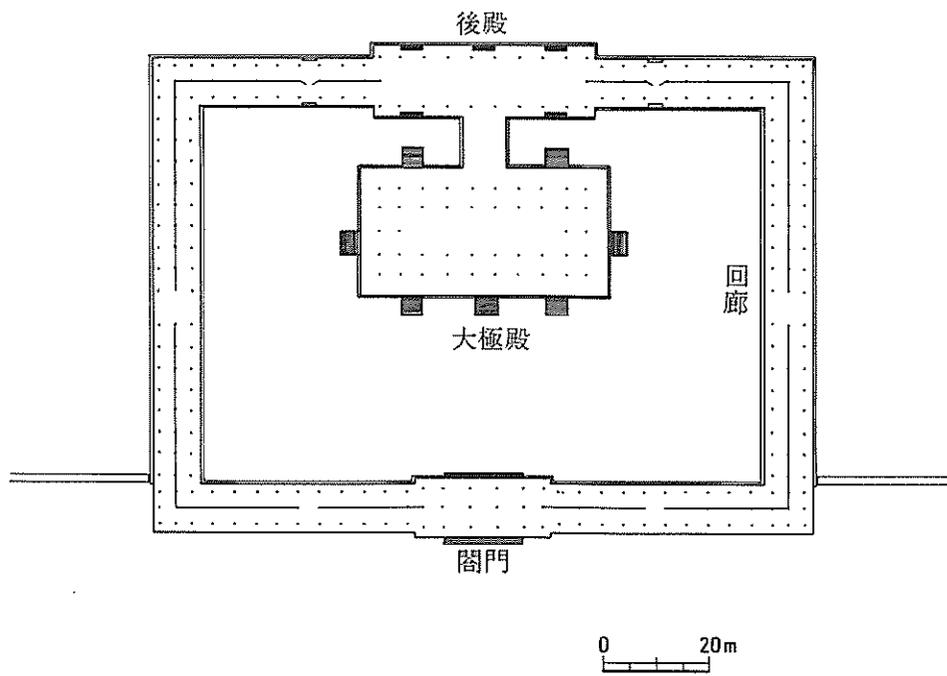


図3 平城宮大極殿院復原図

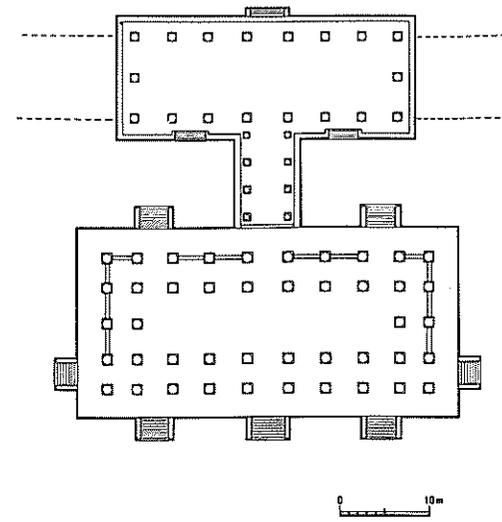


図4 難波宮(聖武朝)大極殿及び後殿復原図

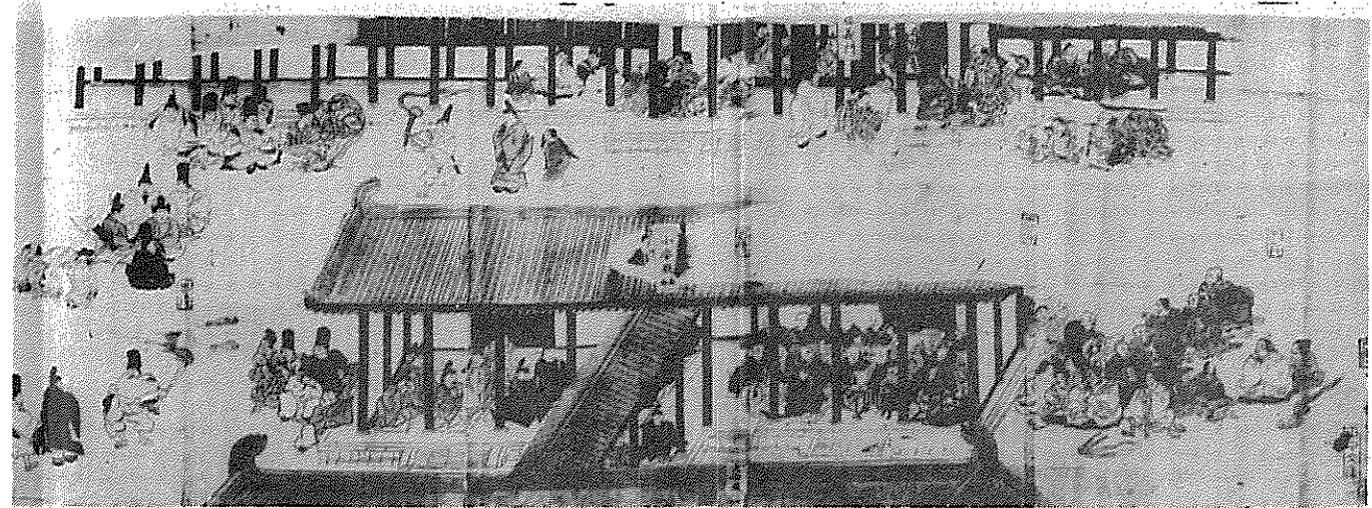


図5 「年中行事絵巻」にみえる平安宮大極殿後殿(小安殿)

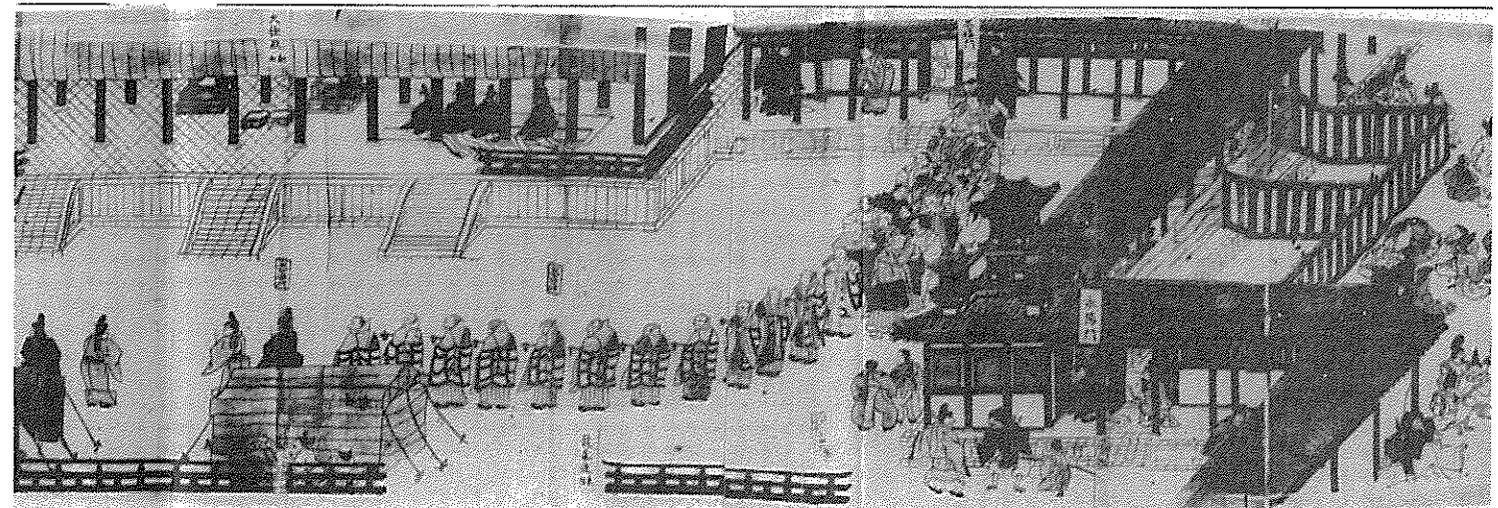


図6 「年中行事絵巻」にみえる平安宮大極殿及び回廊